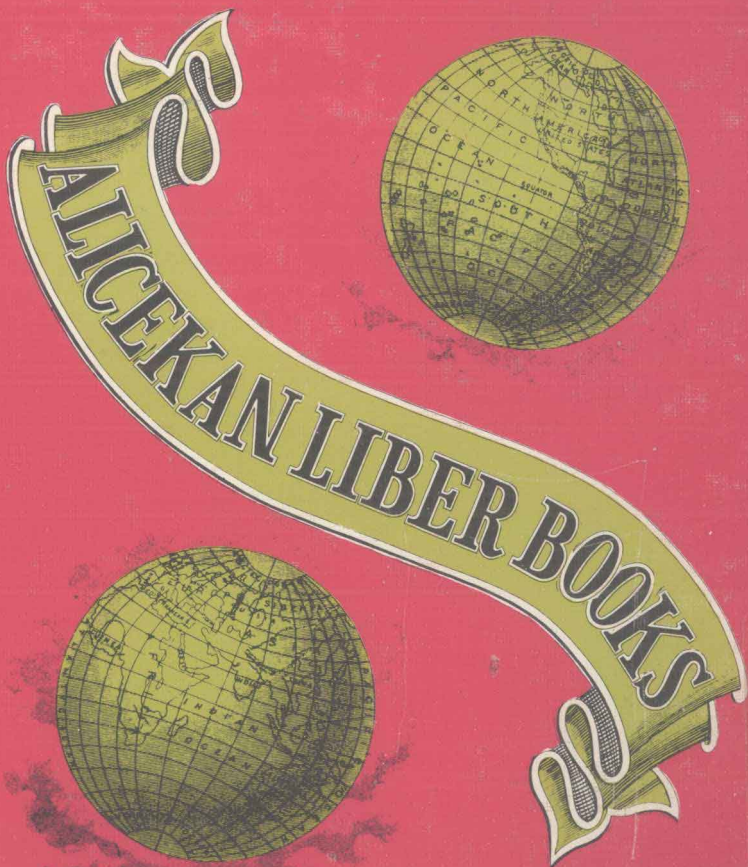




たのしい詩・考える詩

巽 聖歌





たのしい詩・考える詩

異 聖 歌



アリス館牧新社

図書館文庫 9

NDC 991/304P/19cm 検印省略

たのしい詩・考える詩

著 者 巽 聖歌

1980年3月10日改訂第1版

発行者 東 政彦

東京都千代田区神田錦町3-21

電話(代)293-9755

アリス館牧新社

印刷／東海プロジェクト・製本／小高製本

© Seika Tatsumi 1980 Printed in Japan (分)8392 (製)70009 (出)0144

*乱丁・落丁本はおとりかえます。

* この本のはじめに *

「たのしい詩・考える詩」は、小学五、六年から中学生のみなさんのためにと思って、最近の詩壇の詩から選抜した少年少女詩集です。といっても、学校の先生や、父母のみなさんが、読んでくださってもいいのです。「詩」というのはだれにでも愛され、親しまれるという徳性をもっているのが普通だからです。そういう意味では、解説はいらないのですが、この本は、「詩」を読むことになれてない人のために、すこし、わたしの考えを書いてみました。もちろん、みなさんの考えが、わたしと違っていても、かまいません。つぎの説明を下地にたのしく読んでください。

はばたく若狭のコウノトリ

進学・卒業・就職にはじまる、春の章です。木の芽がもえ、草花が咲き、鳥が巣をかける、希望の季節といっているでしょう。中学卒業期の若いあんなやんばかりでなく、少年少女のみなさんにとっては、重い冬服をぬいで、外へ

とびだす待望の季節です。同時にまた、すこしづつ背丈が高くなったり、高学年になって学科がふえたり、だんだんおとなに近づくにしたがって、両親のごとがふえたり、憂うつな春でもあるわけです。詩人たちは、この季節の少年期を、どんなふうに歌いあげているでしょう。

鹿がクロッカスの花の上を

ここには、すこしニュアンスのちがった作品を、ならべてみました。比較的若い詩人群の作品ですが、手法もまた若々しいです。主知的なもの（理性や知性をだいにする）、抽象的なもの（具体的の反対）、思惟的なもの（考えや空想）いろいろです。作家も新しいが、作品もフレッシュです。こういうところから、こんごの新しい詩が生まれてくるのではないかと期待されます。まどさんは、大ベテランですが。

山の入道雲までゆすぶって

夏の詩をふんだんに、ぶちこんでやろうと思いました。しかし、夏の季節というのは、ハバがひろいんですね。晩春初夏のころから、夏休みが終わり、残

暑に苦しむときまで、いろいろの生活があります。なかでもっとほしかったのは、少年少女のみなさんの登山とざんすがたでした。これはじっさいに、よく見る生活ですからね。それでも、村野むらのさんと原田はらださんに、登山とざんに関連した詩がありました。このつぎは、キャンプやユースホステルの詩などもほしいものです。

太平洋たいへいようの沖おきが青い

ここには、海の詩を集めてみようと思いました。いろいろな海があります。ヨットやタンカーは、近年の新しい風景ふうけいです。そういう作品もほしいと思いました。けれども、ここにはできません。作品化されるまでには、そうとうな時間じつが、必要なのだということが痛感つうかんされました。

ところが、変わったのが見つかりました。いま問題もんだいになっている沖繩おきなわの近く、奄美大島あまみの詩です。わたしは、これにひかれました。パイヤやハブの南方風物詩ほうふうぶつですね。そしたら自然しぜんに、わたしは自作に、北方領土問題ほつぽうりょうどもんだいの詩のあることを思いだしました。日本は海国です。まだまだ、いろいろな作品がでそうです。

大風があばれまわった

季節きせつの詩うたといつても、詩うたというのは花鳥風月からようふうげつを外からから描写びやうしやするということではないはずです。作者そしやのところが、外界がいがいの刺激しげきによって、創作心そうさくしんをよび起こしたものを書く、——そういうのではないのでしょうか。

台風たいふうシーズンをむかえると、きゆうに秋あきらしくなります。海浜地方かいひんでは台風たいふう一過いつか、カニ売りの声こゑに、まず秋が目ざめさせられましょう。内陸部ないりくでは、法師ほうしゼミやコウロギでしょうか。

秋は運動シーズンであるとともに、読書よきやうシーズンともよばれていますね。それから、みのりの秋でもあるわけです。さあ、詩人たちの声を聞いてみてください。さい。

若いあんちゃん おならびなさい

詩うたには、感情かんじようや感性かんせいをととぶと同時に、真実まじつを追求ついきゆうしたり、思想しそうをのべたりする形式しきようのものもあります。この章しょうには、その自分の考えを書いた詩に重点をおいて、作品を集めてみました。第二章の「鹿しかがクロッカスの花の上を」という作品群くんに、比較ひかくして研究けんきゆうしてみるとおもしろいですね。

この章は、現実主義的だともいえそうだし、教育的だ、道德的だともいわれそうです。

森へいくと杉のはっぱが

冬の章です。

冬にも南方型と、北方型があるようです。たとえば、杉の葉をひろいにいくのは、東北地方では秋です。南方ではこれが、冬のはじまりとなります。そのうえ、東北・北海道・北陸・山陰地方では、大雪や大吹雪でもやってこない、冬という感じがありません。

みんなのなかには、年末から年始にかけて、スキーに出かける人もあります。そうですね。そこで冬を、たんまりと味わってくるわけです。

東京地方では、二月か三月になって、きゆうにどか雪がふることがあります。それがたいいてい、年に二度か三度でおしまいです。太平洋岸の関東以西では、どこもそんなことでしょう。冬のたのしみとかなしみを、味わってみてください。

白いうわぎのおじさん

冬のたのしみは、氷すべりやスキーもありますが、なんといっても、いちばんは「冬の夜がたり」です。いまは、ストーブや電気ごたつでしようが、むかしは、囲炉裏や火鉢や練炭ごたつでした。諸国の「むかし話」も、そういうところで生まれました。

さて、新しい時代の「冬の夜がたり」からは、どんな話が生まれるでしょう。ここには、新しい物語詩とでもいうようなものを、集めてみました。

個々の詩についての解説は、本文を読んでいただきます。といってもわたしは、国語学習や、文芸学的な解説はしませんでした。それよりもっと原始的なもの、詩人の書いた作品ですから、その詩人の精神にふれていただくように、内輪の解説にとどめました。詩人たちの精神や、そのナイーブな韻律に、直接にふれてもらいたかったからです。

それにしては、自分の作品が多くなりすぎました。最初は三編のつもりでしたが、一冊の本としての構成を考えていくうちに、ここにはこんな作品を入れたい、あそこにはああいう作品を入れて、もっと八章にわけた意図を強めたい

などと、欲^ほばったことを考えたせいです。がまんしてください。その反面、十五年間もの作品の山の整理^{せいり}ですから、捨^すてるにしのびない作品も多数ありました。あれも捨^すて、これも捨^すてて残^{のこ}った作品ですから、これらの作品は近年の傑^{けつ}作集^{さくしゅう}ともいえましょう。

さあ、じゅうぶんに詩を味わってください。

異^{たつみ}
聖^{せい}
歌^か

■ もくじ ■

はばたく若狭わかさのコウノトリ

巣すづくり

山本やまもと和夫かずお

2

力ちからいっぱい

〃

4

すももう

〃

6

北海道ほっかいどう地図ちず

八森虎太郎やっもりとらたろう

11

あんずの花と牛車

高橋忠治たかはしただはる

15

ふんすい

清水たみ子しみずたみこ

19

つまらない日よう

大木実おおきみ

23

李すもも

山室静やまむろしずか

26

はまぐりおえ笛

大江田貢おおえたみつぐ

30

カラマツ林

三越左千夫
みつこしさちお

33

鹿がクロッカスの花の上を

飛ぶ春

稗田 堇平
ひえだ きんべい

38

水仙の少年

中村 隆子
なかむら たかこ

40

月の絵本

中村 隆子
なかむら たかこ

44

こがに

中村 隆子
なかむら たかこ

46

鹿の一家

中村 隆子
なかむら たかこ

47

きりん

中村 隆子
なかむら たかこ

52

春が来た

中村 隆子
なかむら たかこ

54

ハンカチ

中村 隆子
なかむら たかこ

55

ねこ殿へ

中村 隆子
なかむら たかこ

61

ねこが夜くる

中村 隆子
なかむら たかこ

62

さんま

中村 隆子
なかむら たかこ

64

川だいき

中村 隆子
なかむら たかこ

69

山の入道雲にゆうどうぐもまでゆすぶって

夏の絵

村の有線放送

川のフィルム

ひるねどき

トノサマガエル

氷こおり水みづ

夏の水

山の馬

アルプスの思い出

山から降りてきた人

太平洋たいへいようの沖おきが青い

和田徹三わだ てつぞう

高橋忠治たかはし ただはる

真田亀久代さなだ きくよ

藤井逸郎ふじい いっさろう

大西貢おおにし みつぐ

小出ふみ子こいで ふみこ

阪本越郎さかもと えつろう

和田茂わだ しげる

村野四郎むらの しろう

原田直友はらだ なおとも

72

75

79

81

85

88

91

94

97

102

星 秋 ス 海 大
 の イ の 風
 こ ツ 子
 え チ が
 へ ヨ に
 った

納 青 海 ハ パ 少 海 水 海
 沙 函 函 函 函 函 函 函 函
 布 連 連 連 連 連 連 連 連
 岬 絡 絡 絡 絡 絡 絡 絡 絡
 に 船 船 船 船 船 船 船 船
 て に て に て に て に て

山 巽 原 酒 巽 阪 山 野 草 巽
 室 たつみ 田 井 たつみ 本 下 野 くさの たつみ
 静 しずか 聖 直 朝 聖 越 清 瀬 心 聖
 歌 か 友 と 彦 ひこ 歌 郎 三 正 平 歌

152 149 146 142

135 131 126 123 121 118 114 110 106

都 会 の 秋
 コ ス モ ス
 晩 秋 ・ 山 家 の 図
 竜 の ひ げ の 実
 ミ サ イ ル 一 号 物 語
 化 石

柴 野 民 三
 田 中 冬 二
 吉 田 瑞 穂
 鎌 谷 嘉 道
 175 168 164 161 158 156

若 い あ ん ち ゃ ん お な ら び な さ い

わ か も の
 病 院

国 分 一 太 郎
 186 180

火 を パ イ プ で も つ て

く る ま で

お な ら び な さ い

紙 ヒ コ ー キ に つ い て

ふ ろ や

無 着 成 恭
 野 口 茂 夫
 嶋 原 一 穂
 近 藤 東
 203 199 194 190

大けやきの声
おばあさんはこうし
て文字をおぼえた

寒川 さむかわ 道夫 みちお 208
山下 やました 清三 せいざう 211

森へいくと杉のはっぱが

少年の森

与田 よだ 準一 じゅんいち 216

風船歌

”

ぼくのぜに

青木 あおき ひろし 224

とうちやんと

ばあちゃん

”

にくのつなわたり

”

すきやきなべ

”

少年の海

巽 たつみ 聖歌 せいか 232

雪

つづきますよ

心配

原田 はらだ 直友 なおとも 239

犬の星

那須田 稔 なすだ みのる 242

白いうわぎのおじさん

青いキップ

神話の巨人 しんわのきょじん

マリン・スノー幻想曲 げんそうきょく

ちやっくりかきす

きつちよむさん天へのぼる

タンポポ・ヘリコプター

月世界の征服 つきせかいのせいふく

巽和 たつみ わだ 聖歌 せいか 徹三 てつぞう

藤田 ふじた 圭雄 たまたお

高橋 たかはし 忠治 ただはる 小林 こばやし 純一 じゆんいち

作品の発表誌
作者紹介

277 275

267 264 261 259 255 252 248